

苺菓 : さて、今週も先週に引き続き、ミックスチャットのコーナーからお届けします。

大谷 : このコーナーでは、毎回お仕事や学びに関する専門家や、それらを楽しんでいる達人をお迎えして、楽しいトークを繰り広げようというコーナーです。

さあ、今週も先週同様、「障害者も働く」というテーマでゲストの方とのトークの様子をお届けしたいと思っております。

苺菓 : はい、ゲストの方は3名おられましたよね。

大谷 : はい、聴覚障害のある中川綾二さん、発達障害のある元村祐子さん、そして両足が使えず、車椅子ユーザーである大内秀之さんの3人の方々とトークを繰り広げています。

苺菓 : はい。先週はですね、SNSの方でも聴覚障害のある方が「ラジオでね、喋って登場されてるのがすごい」という感じの投稿を見かけたんですけども、お話をお聞きしている限りは、障害があるからどうみたいなことは決して思えなかったんですよ。また、本当に皆さんしっかりと働いて、ちゃんと現場の戦力になっておられるということでしたので、聞いていてとても前向きになるお話でしたが今週は？

大谷 : はい。もちろん今週も前向きになるお話なんですけど、やはり障害者が働く上には課題や困難もあります。それをどうやって乗り越えていけばいいのか。それは当然ですが、社会全体で考えていかねばならないことだとトークは進んでいきます。「障害者も働く」早速お聞きいただきましょう。

.....

大谷 : 先週は「いやいやめっちゃ働いてるよ」というお話お伺いさせていただきましたけど、今週は、「とはいうものの」というところを伺っていただければと思うんですけどじゃあトップバッター中川さんから、もう一回改めてどんなお仕事をされておられて、困ったことのお話をお伺いできればと思うんですけど。

中川 : ありがとうございます。僕は、大学卒業後に6年間通信会社で働いていて、代理店営業したりとか、コールセンターの後ろでサポートをするっていうお仕事をしていたんですけど、まずコミュニケーションが大変。

大谷 : いやそうでしょう。

中川 : 大変っていうのも、僕は先週もお伝えしたように、口元を見ながら、相手とコミュニケーションを取るっていうのが、普段のコミュニケーションの取り方になるのでちょっとしたことで口元が見えなくなったりとか、あとは、僕めちゃくちゃ喋れるじゃないですか。

大谷 : めちゃくちゃしゃべる。

中川 : めちゃくちゃしゃべれるんで、聞こえないことを忘れられるっていうことはめちゃ多いんですよ。

元村：あー、わかるわ。

中川：僕はありがたいことに、採用いただく時も、一応障害者枠ではあるけど、「基本的にうちの会社は、障害者としては扱わない、一個人として扱うから、自分自身の障害のことだったり、そういったことはできれば自分自身で発信をして、周りに助けてもらうとか、周りに理解をしてもらうようにしてほしい」っていうふうに言われて入ったんですね。僕は、もう「望むところや！」と思ってて入ったんですけど、こう最初はね、もういっぱい、僕耳聞こえないんで、ちょっと口元を見せながらゆっくり話してもらえると分かりますとか、そういったことを最初はめちゃくちゃ丁寧に伝えていくんですけどやっぱり僕めっちゃ喋れるんで。

一同：(笑)

中川：一回忘れられて、「あ。ごめんなさい。ちょっとゆっくり話してもらっていいですか?」「ああ、そうやったね。わかったわかった」って言われて、でまた普通に喋ってたらまた普通にわからなくなって、「あ、ごめんなさい。もうちょっとゆっくり喋ってもらっていいですか?」っていうのが何回も何回も起こるんですね。そうすると、ちょっとずつ僕も、心が折れてく。

大谷：ああ、確かに。

中川：あ、前も言ったのになあ、なんでわかってくれへんやろうっていう。ちょっと嫌な思いが溜まっていて、僕はそれをちょっと我慢しちゃうっていう癖があって、なかなかちょっと言えなくなって、ちょっとしんどくなるっていうことがやっぱり多かったです。

大谷：そうですね。いや、なるほど。よくわかりました。じゃあ、元村さんは十何回も転職されたご経験を持ちますので・・・

元村：私ね、発達障害って診断される前は看護師してたんですよ。

大谷：看護師?

元村：看護師してたんです。で、言うたら、もうシップ持ってきてとか、薬何々してとか、いろいろ患者さんからも先輩からもいろいろ言われるんですけど、「はい!」と言って右向いて左向いたら全部忘れるんですよ。記憶できへんから。その時は自分でも、なんで人ができること、こんなことがわからへんのやろう、忘れてしまうんやろうとか、自分を責めるわけなんです。でも努力するんですよ。これも忘れんように、点滴を終わったら忘れようにタイマーかけようとか、いろんなタイマーぶら下げて何が鳴ってるかわからへんようになるとかね。そんなこともありながら一生懸命やってるんだけど、手を抜いてるとか、努力してないとか誤解されるわけなんですよ。自分の中では必死なんですけど。で、そうするともう職場に居場所がなくなって、転職っていうようなことを繰り返してきたんですが、ある施設、障害者支援施設、福祉施設で看護師をしていた時にカミングアウトさせていただいたんですよ。

大谷：障害あります、と？

元村：そうです。職員さんにも皆さんにも、私こう特性があるので、指示はメモでくださいとかね。いろいろこう優先順位をつけられないので、何月何日何時までにこの仕事っていうのを付箋でもらってたんですよ。そうすると自分で優先順位考えなくても早くせなあかんのからやって、終わったら剥がしていけば、もう勝手に優先順位が指示と同時に付けてもらえるって言うんですけど、そういうふうにしてもらったら普通に働けてしまうので、中川さんと同じようにつつい忘れられるんですよ。特性があることを。

大谷：なるほど。

元村：それで口頭でこれやっというとか何々持ってきてって言われて、「はい！」言っ忘れてから、なんでも持って来てくれへんのって今度怒られるんですよ。だから言ってるのになんで・・・同じです。だんだん心折れるんです。文字でメモでいただくとありがたいんですけどって最初はお願ひするんですけど、同じことを繰り返すと、あんまり言うのも悪いなっていう気にもなっけて、我慢しちゃうという。

大谷：そこはよく似てますね。

元村：似てますね。

大谷：これは多分、ある部分見えない障害というか分かりづらい。まあ、確かにね、中川さん補聴器つけておられるけど、この頃の人ってイヤホンをしてるからわからないよね。なので、わかりづらいというところがあると思うので、そういうことがあるのかなと思いますけど。大内さんは、正直分かりやすい障害ですね。変な言い方ですけど。それでもやっぱり色々ありました？

大内：分かりやすい。僕もずっとお二人の話を今聞いてて、違うのは分かりやすいか分かりにくいかだと思うんですけど、見た目がね。だから本当に車椅子に乗ってて嫌な思いとか困ったこととかっていうのは、明らかに白い目で見られる、向けられるという。

元村：ああ～、そうなんですか？

大内：本当に、仕事とかでも日常生活でもよく車乗るんですけど、サービスエリアとか行って、手を引いてね、お母さんと娘さんが手を引いて歩いてるところに、その2人が前から僕の方に来たら、もう本当にね、逃げるように道を開けてくれるとか未だにある。本当にちっちゃい子供がね、「なんであの人車椅子乗ってるの？」ってお母さんに聞いたら、「そんなこと言っちゃいけません」みたいな。

元村：ああ、いけないんやね。いけないこと・・・

大内：だから僕マンションに住んでるんですけど、エレベーターに乗って、ちっちゃい子とかがじっと僕の車椅子を見してくれる時は、「かっこええやろ」って言うんです。「おっちゃんな、足動かへんからこれ乗ってんねんで」っていうのを説明して

あげると、子供はキラキラした顔で、「なんで？なんで？」。本当に病院の待合室とかでも、じーっとね、僕が待合室に入る手前からずっとちっちゃい子供を見てくるんですよ。凝視して。けど親御さんたちは見て見ぬふり。やっぱ大人たちはね。でも近づいたら足を退けてくれたりとかして、感じてはくれてるんですけど。でもそういう子供とかを見ると、僕は「乗ってみる？」とかって。待ち時間でみんな暇じゃないですか。だから2歳のこの前も女の子に乗せてあげると。まあ僕はパイプ椅子に座るんですけど。子供はもう自分で動かしたりとかして、楽しそうに。でもう、お兄ちゃんに返そうねって僕は乗ったら、「もう1回！もう1回！」とか言って駄々こねたんですよ。

何が言いたかったっていうと、わかりやすいからこそたくさんの人に知ってもらって、もっとカジュアルに、もっと障害者・健常者とかっていう枠ではなくて、「こういう乗ってる人がいるんだよ、僕は足が動かないから乗ってるんだよ、けどこんなにかっこよくて進みやすいものなんだよ」っていうのを知ってもらっただけだから車椅子が入口で、障害のある人を理解してもらえたら、聴覚障害であったり発達障害の人も、じゃあ「あの人も忘れやすいだけやん」って。「大内さんは足が動かないだけやん」って、「あの人は耳が聞こえにくいだけやん」っていうふうに「だけやん」っていうものをもっともっと広めていきたいなと思ってるんですけど、今障害福祉のど真ん中で働かせてもらってますけど、差別偏見とか、見ちゃいけない・言っちゃいけないとかっていうところがあるのが、僕は悲しいんで、大谷さんはじめ愉快的なこの仲間たちと一緒に、そういったあの意識をちょっと変革していければいいかなと思ってます。

大谷：この番組はね、まあお仕事番組なので、企業の採用の方とかもお聞きいただいていると思うんですけど、企業の人にね、今の流れでアドバイスというか、お願いをするとすると、どういうところに気を使ってほしいと思われませんか？

大内：一番は、どんな障害のある人でも採用にチャレンジしてほしいです。何々障害だから、車椅子に乗ってるからとかっていうので、どうしようっていうんじゃないで、じゃあもう車椅子の人でも雇ってみようって言って雇ってもらいたいんです。で、そこから先は、雇われた人次第です。めっちゃ頑張る発達障害の人もあるし、めっちゃサボる発達障害の人もあるかもわからない。

大谷：採用してみないとわからない。

大内：わからないです。でも、障害を理由にふるいにかけるんじゃなくて、チャレンジしてどんどん採用してもらった方が、その会社の本当の価値っていうのは気づいていけるんじゃないか。結局みんな違うんだなっていうのがわかると思うんです。

大谷：そうですね。なるほど。

大内：だからチャレンジしてほしいなと思います。

大谷：じゃあ今の受けて元村さんは？

元村：はい、私はね、やっぱり大内さんと同じ思いなんですけれども、障害者の元村って私は見られたくなくて。元村の中に発達障害の特性がある。まず人として見てほしいんですよね。でも企業の方も同じですし、で、支援を受けるってあの折り合いの話なので、大内さんがおっしゃったように、企業だけに丸投げして我慢させるのと理解してもらうのとは違うと私は思っているんで、そこをうまいこと、支援してもらい側も、うまいこと SOS 出してやれることは一生懸命頑張る。それはもう障害云々じゃなく、人として、だと思ってるので、そこを企業の方にも見ていただきたいなと思います。

大谷：はい、じゃあ中川さん。

中川：はい、ありがとうございます。僕はそうですね、お二方も仰ってたんですけど、僕の場合、採用担当の方がすごく理解のある方で、聴覚障害に関してもすごく理解のある方ではあったんですけど、ついた（配属された）職場の周りの方がそういう聴覚、聞こえない人のことをあんまり知られてないような方々がやっぱりいらっちゃって。だからその温度差にすごくびっくりしたっていうのが正直な感想としてありました。で、採用される企業さんをお願いしたいなと思うのは、その社員さん向けに何か想像してみるみたいな、そういうトレーニングというか、考える機会をなんか作っていただけるといいのかなと思っていて。想像するというのは、自分自身と他の人との、立場の違いを想像してみるっていう、それだけで全然いいと思うんですよね。そうすると、じゃあ耳の聞こえない人はこういうことで困るのかなとか、発達障害だったらこうかなとか、車椅子の方だったらこうかなみたいな、そういうなんか想像をまずしてもらっていうところがまず大事なかなと思うので、そういう機会をよかったら作っていただけるといいなっていう風に思います。

大谷：イメージトレーニングするような機会ってことですか？

中川：そうです。

大谷：なるほど。さあ、残り時間もあと2分3分ぐらいになっちゃったんですが、あとに続く障害のある方に対して、エールというか、応援メッセージを送っていただくとするとなんでしょう？中川さん一言お願いします。

中川：はい、ありがとうございます。応援メッセージ？

大谷：はい。

中川：応援メッセージ？

元村：ははは。応援応援。

中川：そうですね。なんだろう。自分がやりたいことっていうのは曲げずに、なんかやってもらえたらいいんじゃないかなと思います。障害を理由に諦めるんじゃなく僕だったら、僕は最初営業とか無理かなって正直思ってたんですけどね。コミュニケーションの障害でもあるんで、そうやってうまくコミュニケーション取れないから、営業は難しいんじゃないかって思ってたんですけど、やり方によるというか、自分

自身がやりたいと思ったら、じゃあそれをどうやったら乗り越えられるかなって
いうふうに考え始めることができると思うので、まず最初から自分で諦めないって
いうことを大事にしてもらえないかなと思っています。

大谷：なるほど。諦めないね。

中川：はい。

大谷：はいじゃあ、元村さんお願いします。

元村：はい。発達障害の人の中には、すごく得意なことがものすごいできる人、得意と
不得意の差が激しいのが、私たちの障害特性でもあるので、みんなと同じっていう
ご自身のイメージだけにとどまらず、自分の得意なことをどんどん活かして働いて
いける社会に変わってきているなど、私は肌感覚で思うので、諦めずにぜひぜひ
ご自身の好きなことトライして、楽しんで。もう人の目じゃなく、自分がどうした
いかっていうのを中心に、仕事を選んで、いろんなことにチャレンジして、みんな
で楽しく働いていけたらなと思っていますので、お願いします。

大谷：元村さんご自身も明るいもんね。

元村：私ってこれしか取り柄ないんで。

一同：(笑)

大谷：さあ、大内さん、もうほとんど残り時間がなくなってきましたが、一言でまとめて
ください。

大内：本当に一生懸命やりましようってことです。一生懸命。挨拶とか、そういった
ことだけで社内の雰囲気って変えられると思うので、「障害があるけど、あいつは
挨拶元気よくするな」ぐらい、それぐらいでも全然いい仕事するきっかけになると
思うんで、一生懸命まず挨拶からしてもらいたいかなと思います。

大谷：どんな世の中になればいいと思います？

大内：一番は、本当に今日生まれてきた赤ちゃんが、生まれてきてよかったなっていう
世の中にするためにやっぱり挨拶であったり、目を見て話をするとか、相手のこと
をイメージして仕事をするとかそういう社会が一番いい社会なのかなと思います。

大谷：いいこと言いますね。

大内：たまには。

一同：(笑)

大谷：どうもありがとうございました。

元村：ありがとうございました。

中川：ありがとうございました。

.....

大谷：さあ、お話を聞いていただいてどう感じになりましたでしょうか？

苺菓：やっぱり先週はできることとかね、すごいかなり前向きなお話を聞いてすごいつて感じだったんですけども、その裏には本当にたゆまぬ努力があって、さらに1個不思議だっていうか、なるほどって思ったのは特に中川さんめっちゃ喋れるので、何度もおっしゃってらっしゃって、私もすごいなあと先週は思ってたんですけど、頑張っ頑張っ喋れるようになったがゆえに、聴覚障害ってことを忘れられてしまって、苦しみがあるっていうところがすごく刺さりましたね。
その視点はなかなか持てないなって思って気づきになりました。

大谷：元村さんも発達障害あるけれども。

苺菓：そうですね、おっしゃってました。

大谷：普通に喋る、コミュニケーションできるから、わからなくなるんですよ。僕らが相当理解をしていかないことにはと思いますけど、でも僕の中で、彼らも自分たちでなんかしていかなければならないという思いを持っておられることが、なんかかっこいいなと思いました。

苺菓：そうですね。障害のあるなしに関わらずに、自分の当たり前をね、世界の当たり前と思わないことが大事なかなってちょっと思いましたね。

大谷：本当ですよ。